

# 品詞って科学の概念なんだろうか

本田茜吏 (Senri Honda)

無所属

品詞とは、一般に、形態統語論的な基準にしたがって語を分けたグループのことであり、具体的には名詞や動詞、形容詞や助詞などのことを指す(斎藤, 田口, 西村 2005)。たとえば庵 (2012) によれば、日本語の名詞は、単独で文の構成要素になることができ(自立語)、助詞を伴って述語と直接関係が結べる、などの形態統語論的な特徴を兼ね備えた語の集まりとして考えられる。具体的には、{阿倍仲麻呂, 井の頭公園, 浮き輪, 絵の具, オポッサム...}といった、語の集合として捉えることができるだろう。本発表では、言語学で使われるこうした品詞概念が自然種か否かを検討する。

自然種の典型例としては、酸素や窒素などの元素や、水のような化合物、トラなどの生物種が挙げられる。戸田山 (2021) によれば、自然種は四つの点で特徴づけられる。第一に、人間の分類実践とは独立に世界の側でカテゴリーとして存在している。第二に、投射や帰納、外挿に使えるという、認識論的な有用性がある。第三に、自然種に属する成員はある恒常的属性、ないしそのクラスターを一様に共有しており、特定の因果メカニズムがそれを支えている。第四に、上の三つの条件を満たす最大のクラスが自然種である。トラを例に考えると、第一にトラというカテゴリーは人間の分類実践からは独立している。第二に、これまでみたトラが縞模様であれば次のトラも縞模様だろう、と投射を行うことができる。第三に、縞模様であり肉食であり前足の筋肉が発達しており...といった、トラに見られる恒常的な属性のクラスターは、特定の DNA 塩基配列から因果的に説明される。第四に、上の三つを満たすものの最大のクラスがトラという自然種である。

品詞が自然種か否かを考える動機として、言語学で使われている概念が何なのかを明確にする、ということが挙げられる。戸田山 (2021) は、心理学で用いられる〈感情〉概念が自然種か否かという議論を行う中で、《感情は自然種か》と、《感情は心理学という科学にとって有用な概念か》という二つの問いを分け、感情が自然種でなくとも心理学に有用な概念である可能性を示唆した。本発表では、言語学における品詞概念についても、《品詞は自然種か》と《品詞は言語学という科学にとって有用な概念か》という異なる問いが立てられると主張する。さらに、《品詞は自然種か》という問いに答えようとするのは、《品詞は言語学にとって有用な概念か》への回答を与えるのに有効な手段の一つであると主張する。品詞が自然種か否かを考える動機はここにある。

以上のような問題意識のもと、本発表では、心理言語学での研究を参照しながら、品詞が自然種か否かを検討する。発表者が心理言語学に注目するのは、心理言語学が、文法や文理解、品詞などといった言語学における諸概念の因果的な説明を与えるように思われるからである。品詞が実際に自然種であるか否かの決着は今後の経験的探求に委ねられることとなるだろうが、以上のような道筋を通して、品詞概念が言語学にとって有

用な概念なのか、またいかなる点で有用なのかが明らかとなる。

#### 参考文献

- 庵功雄. (2012). 『新しい日本語学入門』.スリーエーネットワーク, pp. 36-45
- 斎藤純男, 田口義久, 西村義樹. (2015). 『明解言語学辞典』. 三省堂, pp. 95-96
- 戸田山和久. (2021). 感情って科学の概念なんだろうか. エモーション・スタディーズ Vol.6, pp. 91-104